

小さな学校の「強み」を土台に、自然に恵まれた学習環境を生かした体験活動と読書活動をつなぎ、「豊かな感性」と「深い思考力」を育成する学校運営を目指して

函南町立桑村小学校 校長 渡邊 衛

1 研究目的

桑村小学校の児童が活躍するであろう未来の社会においては、AI技術がますます進展し、大きな社会の変化が訪れることが予想される。そこで生活すべく児童は、これまでの知識の習得はもちろんのこと、様々な問題に対して自ら立ち向かい、深く考え、他者と協働して解決していくことが求められる。また、そのためには人としての「豊かな感性」や「深い思考力」を発揮し、自らの考えを形成したり、新しいアイデアを創造したりすることが必要となってくる。

本校は、全校児童数が80名の規模の小さな学校である。周りは、畑や木々に囲まれ、これまでもこうした自然に恵まれた学習環境を生かした豊かな体験活動が展開されてきた。しかし、この体験活動が児童の「豊かな感性」と「深い思考力」の育成にまで達していなかった状況にあった。そこで、本校の強みである豊かな自然環境を生かした体験活動とあらたに読書活動をつなぎ、「小さな学校」の強みを土台として、これからの社会に生きる児童が必要とされる「豊かな感性」と「深い思考力」を育成する学校運営の在り方を児童の学びの姿から検証することにした。

2 研究方法

(1) 桑村小学校の児童の実態把握について、以下の内容を実施

学校評価とSWOT分析、児童自身による読書活動に関する意識調査を実施し、児童自身のこれまでの振り返りを大切にするとともに、全職員で学校の教育活動の強みや弱み等を分析・考察し、児童に必要な資質・能力に「豊かな感性」と「深い思考力」を追加し、今後の教育活動の方向性を共有する。

(2) 校内研修を柱に、以下の内容を実施

学校長の「主体的・対話的で深い学び」を柱とした授業改善の講話では、言語力の獲得をもとに深い思考力の育成が大切であることを理解し、今後の教育活動で不断の授業改善とともに読書活動を柱に感性と思考力を高めることの必要性を確認する。そして、新たに設定した資質・能力である「豊かな感性」と「深い思考力」の育成に向け、豊かな体験活動と読書活動をつなぐことを全職員で共有し、実践する。

(3) 読書活動の推進を柱に、以下の内容を実施

ア 小さな学校の「強み」を発揮し、読書活動推進リーダーを第6学年児童から任命し、図書の魅力と読書活動の効果を児童と教職員とで共有する。そして、児童と教職員がいかにして読書活動を推進していくのかをともに考えることにより、協働で読書活動を推進する。

イ 図書の魅力と読書活動のもつ効果を読書通信『読書活動への扉を開いて』の刊行により、保護者や地域住民とつなぎ、読書活動を通して「豊かな感性」と「深い思考力」の育成を学校とともに推進する体制づくりを整備する。

(4) 自然環境に恵まれた体験活動の実践とその振り返り、そして、読書活動との連携を柱に、以下の内容を実施

体験活動を実施して終わりにすることなく、各自が学びを振り返り、文字や絵画、音声等、自分なりの方法で表現し、自分の成長を自覚する。そして、読書活動へとつなげていくことで、目指すべく資質・能力とした「豊かな感性」と「深い思考力」を相互作用的に高めていく。

3 研究経過

(1) 学校評価と児童による読書活動の意識調査、SWOT分析による桑村小学校児童の実態把握と育成すべき資質・能力の設定

令和3年度末に学校評価を実施した。その中で、保護者や地域住民から、「子供たちが進学する大きな中学校で埋もれてしまわないようにしたい」とか「大きな集団の中で物怖じしな

いで生活できるようにしたい」といった声が寄せられた。中学校進学を機に、小さな学校から大きな学校に移ることへの心配された思いである。ここに本校のもつ「弱み」が想像される。小さな学校であるがために、大きな学校で育成されるであろうコミュニケーション能力が十分に育成されず、自分の力を発揮することができないのではないかという不安である。

令和4年4月に、児童自身による読書活動に関する意識調査と全職員による桑村小学校の教育活動に関するSWOT分析を実施した。児童による意識調査の分析からは、発達段階における「読書活動」に対する意識の持ち方の違いが明らかになった。そして、全職員で行ったSWOT分析の考察からは、「本校の児童は、語彙が少ないため自分の思いや考えを友達に伝えることが難しい」とあるとか「本校の強みである豊かな体験活動が、言語力が乏しいため感性や思考力の育成につながっていないのではないか」等の意見が挙げられた。このことから、多くの保護者が抱くコミュニケーション能力についての不安は、学校の規模によるものではなく、言語力の育成によるところの感性や思考力の伸張と大きく関係しているのではないかと考えた。

そこで、令和4年度の育成すべき本校児童の資質・能力に「豊かな感性」と「深い思考力」を追加し、不断の授業改善の推進とともに体験活動と読書活動をつないだ教育活動を開発、推進していくことで資質・能力の育成を目指すことにした。

(2) 「主体的・対話的で深い学び」の授業改善と思考力の育成

令和4年度に赴任してきた学校長は、過去に静岡県総合教育センターで「主体的・対話的で深い学び」を柱とする授業改善とカリキュラム・マネジメントについて研究してきた経験がある。学校長は、4月の校内研修において、『主体的・対話的で深い学び』を柱とする桑村小学校の授業づくり」をテーマに講話を行った。その中で、「深い学び」の形成には、「言語」のもつ意味とその働きが大切であり、自分の考えを自分の言葉で表現することの重要性を職員とともに考え、共有した。

研修に参加した職員からは、「子供は、自分の言葉で考えがまとめられないから、意味理解までたどり着けないのである。『深い学び』を形成していくためには、豊かな言語力が必要になる。そこが確立されれば、話し合い活動から深く考えることにつながると思う。」であるとか、「本校の『強み』は、自然に恵まれた学習環境にある。そうした『強み』を活用し、豊かな感性を育てていくには、言葉を大切にしたり振り返りが大切である。」等の意見が出された。

そこで、本校児童の課題である言語力を育み、「豊かな感性」と「深い思考力」を育成するためにはどうしたらよいかを協議し、これまでの体験活動と読書活動をつなぎ、それらを言語力の育成と関連づけて、相互作用的に充実・発展させていくことを共有した。

また、読書活動の効果には、様々なことが期待される。その効果を教職員とともに、児童、保護者、そして地域住民とで共通理解を図り、それぞれの関係性をつなぐことで全校体制で取り組んでいくことの大切さを理解した。

(3) 図書の魅力と読書活動の効果を大切にしたい協働的な取組

ア 読書活動推進リーダーの任命と児童と教職員の協働による読書活動の推進

読書活動の効果について、第6学年児童を対象に学校長がゲストティーチャーとともに授業を行った。その中で、図書の魅力と読書活動の効果について話をした。

桑村小学校は、豊かな自然に恵まれている。本校の児童は、この学習環境を大きな「強み」と感じている。この「強み」により、自然を愛する気持ちや他者を思いやる気持ちが育っていることを自覚しているのである。そして、五感が生まれ、感受性が豊かになることも体感している。

そこで、学校長は、次のような話をした。「桑村小学校は、自然に恵まれたすばらしい学習環境にある。感性が豊かになる環境にある。これをもっと大きく育てていくためには読書活動に取り組み、言葉を豊かにすることが必要である。そこで、6年生を中心に読書活動を学校全体に広げ、『豊かな感性』と『深い思考力』を高めていきたいと強く願う。」

第6学年児童は授業を終えて、図書の魅力を再確認するとともに、読書活動に積極的に取り組む思いをもったことが振り返りカードにより確認できた。

次に、今年度、全校に読書活動を広げるにあたり、「読書活動推進リーダー」を第6学年児童から選出し、教職員とともに活動することを働きかけたところ、5月に3名、6月に4名の児童が手を挙げた。ここから、「小さな学校」の強みが発揮されていく。読書好きな児童が、自分の得意分野を思いきり発揮できる環境を設定することができるのは「小さな学校」の強みといえるのではないか。教職員と児童が協働で教育活動を推進していくことは、持続可能な社会の創り手となる児童の資質・能力を育成するうえでも大きな成果が期待される。今回、読書活動推進リーダーが、自分たちの学校を教職員とともに、自分たち自身の力によってよりよいものにしていこうとする姿が見られたことは大きな成果である。

イ 読書通信『読書活動への扉を開く』を刊行し、図書の魅力と読書活動の効果を教職員、児童、保護者、そして地域住民と共有し、協働で読書活動を推進

学校長は、PTA総会と学校運営協議会（コミュニティ・スクール）で本年度の学校経営について説明した。その中で、未来を生きる児童に大切な力として、「豊かな感性」と「深い思考力」の育成を掲げ、本校の「強み」を生かし、豊かな体験活動と読書活動をつなぎ、「豊かな感性」と「深い思考力」を育むことを大切にしたい教育活動を推進することを話し、共通理解を図った。

その教育活動を推進するにあたり、その方策の一つとして、毎月発行している学校便り『さくら』に加え、読書通信『読書活動への扉を開く』をあらたに刊行し、読書活動の効果を学校と家庭、地域社会とで共有することにした。この読書通信は、保護者や地域住民とともに児童の読書活動を推進していくことをねらい双方向的な関係を築くことのできる様式のものを採用した。この方策も「小さな学校」の強みを働かせたものといえる。学校からの便りは、学校から家庭への一方向的なスタイルのものが通常であろう。しかし、今回、学校と家庭、地域社会とを読書活動でつなぎ、本校児童の「豊かな感性」と「深い思考力」を育成するには、これまでの方法では自分のこととして十分に捉えられないのではないかと考え、双方向的なスタイルの読書通信を工夫したのである。保護者からは「毎回の『読書活動への扉を開く』を読ませていただき、校長先生の読書に対する熱意はすばらしいなと尊敬します。私自身も読書が好きで、子供たちと図書館に行くたび、自分の本も1～2冊借りています。毎日忙しいですが、少しでも本を読む時間を作り、子供たちと一緒に読書を楽しんでいます。校長先生のお便りに感化され、私ももっとたくさんの本を読みたいと思いました。これからも『読書活動への扉を開く』を楽しみにしています。」（6年生保護者）等の声が寄せられ、学校と家庭との双方向的な関係性の構築が強く感じられた。

本校の児童の育成すべき資質・能力に「豊かな感性」と「深い思考力」を追加したとき、この資質・能力は、全ての教科・領域において共通した考え方であり、言語力を土台に教育活動全体で育成していくものであると考える。そして、これらの力の育成には、学校という限られた枠の中だけでは達成することが困難であり、「社会に開かれた教育課程」の具現化との関連から、保護者や地域住民と課題を共有して、その解決に向けて協働で取り組むことにした。小さな学校である桑村小学校は、その「強み」を大いに発揮し、質の高い学校教育の実現に迫ることができた。

（4）体験活動の学びの振り返りと読書活動をつないだ「豊かな感性」と「深い思考力」の育成

「豊かな感性」を育むためには、自然環境に恵まれた学習環境の中での体験活動が有効である。本校では、学校運営協議会（コミュニティ・スクール）委員をはじめとする地域住民の応援により、「茶摘み体験」、「米づくり体験」、「野菜づくり体験」、「原生林探検」等、豊かな自然の恵みを受けた教育活動が実践されている。これらの体験活動は、本校の「強み」である。この「強み」を生かした学びから「豊かな感性」や「深い思考力」を育成するには、学びから得たものを自分の表現方法で表出することが大切である。

そして、それらを読書活動へとつなぎ、思いを表出することで、体験活動から得た感性と思考力を読書活動のそれと相互作用的に働かせることにより、「豊かな感性」と「深い思考力」の更なる育成につながっていくことが児童の学びの姿から検証することができた。

4 研究成果(今後の課題等)

(1)本校児童の育成すべき資質・能力に「豊かな感性」と「深い思考力」を追加した。本校の強みである豊かな自然環境の中で感性は磨かれる。そして、それは、読書の世界においても想像力を働かせ、言語力を働かせることで豊かに広げることが可能である。また、思考力においても、普段の授業において自分を深く見つめる学びの中から培うことができ、読書の世界からも自分を見つめ直し、創造力を発揮する思考力を深めることができる。持続可能な社会の創り手となる児童には、「豊かな感性」と「深い思考力」の両方の力が必要となる。

今回、これまで別々に育成してきた「豊かな感性」と「深い思考力」を、体験活動と読書活動とをつなぐことで、相互作用的に育成することの大切さを教職員、児童、保護者、地域住民とで共有し、協働で育成することができたことは大きな成果である。これらの資質・能力の育成は、未来に生きる児童にとってとても重要なことで、継続して取り組むことにより本校の「学校文化」にまで高めていきたい。

(2)児童より読書活動推進リーダーを選出し、教職員とともに学校運営に参画できる体制づくりを構築できたことは、児童自身が自己肯定感や自己有用感を高めるとともに、学校に対して強い誇りを抱くようになったことに大きな意味をもつ。

小さな学校の「強み」を生かし、「豊かな感性」と「深い思考力」をいっばいに働かせることで桑村小学校のすばらしさを体感したことと思われる。学ぶことは、実体験と言語がつながることで更に深い学びへと深化・発展し、大きな力となっていく。今回、児童の可能性を信じ、学校運営に教職員と協働で取り組む読書活動を推進した取組は、自分ごととして学び新しい時代を切り開いていく児童にとって大きな経験となったことを確信する。

今、ここにきて学校の存在意義が問われていることを強く感じる。これまでとは異なる新たな存在理由が求められているように思われるのである。今回、小規模校である本校の「強み」を生かした児童参画型の学校運営の実践は、学校教育の主役である児童の学びを中心とする持続可能な新しいスタイルを構築することができたことに大きな成果がある。

(3)学習指導要領の改訂により、「社会に開かれた教育課程」が重視された。本校では、学校運営協議会委員をはじめ、保護者や地域住民に経営方針を伝え、本校児童に必要な資質・能力の育成について共有し、協働体制を築いている。しかし、課題となるのが取組状況に対する情報発信の在り方とその共有についてである。本校の取組を広く伝え、いかにして、多くの方々を教育活動へと参画させていくのかということが大きな課題であった。

今回、学校長が中心となり発行した読書通信『読書活動への扉を開く』は、図書の魅力と読書活動の効果を教職員、児童、保護者、地域住民が共有する上で効果があった。この読書通信の特徴は、学校と家庭との双方向的なやり取りができるスタイルをとったところにある。これも小さな学校の「強み」を働かせた取組といえる。学校長の図書の魅力や読書活動の効果に対するメッセージに対して、保護者が自分の思いや考えを返すのである。これまでの便りが学校から家庭への一方的なものであったのに対して、双方向的なやり取りができるこのシステムは、学校と協働で取り組もうとする参画意識を高め、読書活動を共に推進していく実践へと発展することができたことに大きな成果がある。

(4)今後、継続して研究を推進していく上で、「豊かな感性」や「深い思考力」の育成において、言語力の育成が大きく関係していることが明らかになった。様々な体験活動を言語化することを含め、豊かな言語力の育成を追究していくことが必要となるのである。そこで、今回の教育活動の取組を言語力の育成とも関連づけ、いかに教育課程に組み込み、教育活動の質を高め、学校文化にまで高めていくのが課題となる。

5 おわりに

皆さんは、いちばん好きな詩を一つ挙げるとしたら、どの詩を挙げるだろうか？

わたしは、井上靖氏の「地球上でいちばん清らかな広場」を挙げる。

この詩を旧湯ヶ島小学校の校庭にある詩碑で知った。その時の感動を今でも覚えている。故郷は、わたしたちにとって何ともいえないかけがえのない場所である。父と母も同様であり、故郷の自然を父母に形容する見事さ。そうした愛すべき全てのものに囲まれて育つ幸せを強く思わずにはいられなかった。(本校読書通信『読書活動への扉を開く』より)

地球上でいちばん清らかな広場
北に向かって整列すると、遠くに富士が見える
廻れ右すると天城が見える

富士は父、天城は母
父と母が見ている校庭でボールを投げる

誰よりも高く、美しく、真直ぐに、天にまで届けと
ボールを投げる



【春、桑村小から見える富士】

今回の研究は、小さな学校のもつ「強み」を働かせて、推進すべき教育活動の可能性と創造性を発揮し、子供を中心に学校に関わる全ての人たちが幸せだと感じる学校を協働でつくっていきたくと強く願い実践したものである。これからも児童の育成すべき資質・能力の伸張を大切に、その実現を目指していきたい。

【参考文献】

- ・『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説総則編』 文部科学省 平成30年2月28日
- ・『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説国語編』 文部科学省 平成30年2月28日
- ・『「資質・能力」と学びのメカニズム』 奈須正裕著 東洋館出版 平成29年5月30日
- ・『個別最適な学びと協働的な学び』 奈須正裕著 東洋館出版 令和3年12月25日
- ・『AI vs 教科書が読めない子どもたち』 新井紀子著 東洋館出版 2018年2月15日
- ・『小さな学校の時代がやってくる スモールスクール構想・もうひとつの学校のつくり方』 辻正矩著 築地書館 2021年2月15日
- ・『授業の見方「主体的・対話的で深い学び」の授業改善』 澤井陽介著 東洋館出版 平成29年7月1日
- ・『教師の学び方』 澤井陽介著 東洋館出版 平成31年3月15日
- ・『10年後の子どもに必要な「見えない学力」の育て方』 木村泰子著 青春出版 2020年11月20日
- ・『社会に出るあなたに伝えたい なぜ読解力が必要なのか』 池上 彰著 講談社 2020年11月18日
- ・『読書をする子は〇〇がすごい』 榎本博明著 日本経済新聞出版本部 2021年5月
- ・『最新脳科学でついに出了結論「本の読み方」で学力は決まる』 川島隆太監修 松崎泰榊浩平著 青春出版 2018年9月
- ・『読書する家族のつくりかた 親子も本好きになる25のゲームメソッド』 印南敦史著 星海社 2021年8月25日